

恋する神父

2005(平成17)年5月19日鑑賞〈ヘラルド試写室〉

★★★★



監督=ホ・インム/出演=クォン・サンウ/ハ・ジウォン/キム・イングォン/キム・インムン (東芝エンタテインメント配給/2004年韓国映画/108分)

……生涯を神に捧げて神父になるはずの真面目な神学生が、突然のじゃじゃ馬娘の登場で大混乱。しかしそこは若い男と女。コメディタッチの展開が連続する中、2人の行き着くところは……？ そして、自己責任にもとづくそれぞれのファイナルアンサーはどんなもの……？ 異色の設定の美男美女による韓国版ラブストーリーは、相変わらず魅力いっぱい！ ひょっとして「デオ グラシアス」は今年の流行語に……？

■神学生の主人公は韓国では異色……？

ヨーロッパ映画には若い神学生を主人公とする映画がたくさんあるが、韓国映画ではそんな設定は異色。そもそも神学生が神父になるためには生涯を神に捧げ一生を独身で通す決心をしなければならないのだから、神学生と恋とはそもそも矛盾するもの……？

そんな異色の設定の主人公キム・ギュシクを演じるのは韓国のテレビドラマ『天国の階段』で大ブレイク中のクォン・サンウ。韓国ではキリスト教徒が非常に多いのだから、こんな設定の映画があっても全然不思議ではないはずだが……。

■じゃじゃ馬娘の七変化は魅力いっぱい！

一方、ジコチューのじゃじゃ馬(?)娘ボンヒを演じるハ・ジウォンは1979年生まれ。『ボイス』(02年)などに出演した今年26歳の「超美人」だが、この映画では迫力ある酔っぱらい女(?)の演技からビキニ姿の披露までサービス満点……？ そして、前半のコミカルな演技と後半のしっとりした演技の両面を見事

に私たちに観せてくれる。この、思い込みの激しいジコチューのじゃじゃ馬娘と日常的に接していくのはチョー大変……！ 恋愛を1度も経験したことのない真面目な神学生などに、果たしてそのお相手がつとまるの……？

神学生にも遊び人が……？

ギュシクの親友ソンドル（キム・イングォン）は、真面目一辺倒のギュシクと違ってかなりの遊び人。神学校を適当にサボって夜遊びも……？ そんなソンドルのとぼっちりを受けたギュシクは、罰として、ソンドルとともにナム神父が主宰している山の上の小さな教会に行くことを命じられたが、そこでもソンドルはよく遊び、そしてまたよく遊び……だったが……？

じゃじゃ馬娘はナム神父の姪

そんなナム神父の教会に突如舞い込んで来たのがボンヒ。ボンヒはナム神父の姪だが、ボンヒの話によれば、恋人のジソと結婚するためにアメリカから戻ってきたとのこと。ところが、ジソと面会したボンヒはあっさりと振られてしまったから、さあ大変。大ショックを受けたうえ、アメリカに帰る旅費もないと泣きじゃくるボンヒだったが、ナム神父はこれを厳しくしかり、「渡す旅費などない！」と宣言。そこでボンヒがとった行動は……？

1カ月のアルバイトが巻き起こす大騒動

ボンヒが宣言したのは、帰りの飛行機代を稼ぐため、1カ月のアルバイトの開始。教会の雑用係だが、その仕事は家政婦から幼稚園児の引率まで何でも……。しかし、必然的にそれに付き合わされることになったギュシクは大混乱……。そもそも、1人酔いつぶれて教会のベンチで寝ていたボンヒを発見したのもギュシクだったし、「聖水」を一気飲みしようとするボンヒを止めようとしてもみ合い、結果的にボンヒと「ファーストキス」を交わすことになったのもギュシクだったのだから……。

こんなボンヒは、ギュシクにとってはじめて「憎しみ」を覚えた相手……。そんな告白をナム神父にしたギュシクだったが、逆にナム神父からは「ボンヒに洗

札を受けさせるように」と命じられ、結果は藪へび……？ さて、ギュシクはボンヒに洗札を受けさせることなどできるのだろうか？

それぞれの決断は、それぞれの自己責任！

この映画終盤のハイライトは2つの場面の同時進行となる。すなわち、一方はギュシクの配慮によってヨリを戻した(?)恋人のジソとともにアメリカへ旅立つため、幸せそうに空港を歩いていくボンヒ。さて、ボンヒはこのまま機上の人となるのだろうか？

そして他方は、いよいよ神父の仲間入りを果たすため、念願の聖職受任式に臨んでいるギュシク。あれほど出来の悪かった親友のソングルはナム神父の指導よろしきを得て(?)一足先に「生涯を独身で通すか」との質問に対して「デオグラシアス」と誓っていた。さてこれに続くギュシクは……？

ボンヒとギュシクが、全く異なる所でそれぞれの「自己責任」で下すファイナルアンサーとは……？

厳肅かつコミカル(?)な映画音楽に感心！

この映画はエンターテインメント性たっぷりの音楽が大きな特徴。映画の中盤で何かを暗示するかのように、神父を目指していたギュシクの尊敬する神学校の先輩が神父の道をあきらめて愛する女性と結婚するシーンが登場する。

真面目で優秀な神学生のギュシクとしてはこれにショックを受けるわけだが、落ち込むばかりではダメとばかり、ボンヒを含めた神学校の友人たちによる歌と踊りのアトラクションが面白い。最初と最後は厳肅に、そして中盤は明るく、楽しく、コミカルに……。

この映画の音楽を担当したスルビアンは、アメリカのバークレー音楽大学で映画音楽を専攻した3人の同級生が結成したグループで、キム・ギドク監督の『3 iron』(04年)も担当しているとのこと。これからも注目していきたいグループだ。

2005(平成17)年5月20日記